



▲両家の挙式に対するくい違いをシビルの勧めで和解させた永瀬ミニスター

ある日、ブライダルサロンに来客がありました。受付の者が、「お客さまは伊藤さん会いたいと言っておられます……とても不機嫌でムスツとしておられます。そのつもりで対応してください」と私を迎えにきました。

私を指名とのことなので出てみると、私がミニスターをやり始めた頃にシビルで挙式をした新郎の妹Aさんとお母さんでした。

詳しく話を聞くと、今回結婚されるAさんは、ウエディング・ドレスを着て父と一緒にバージンロードを歩きたい

という希望を持っており、両親も娘の夢を叶えてあげたいと思っていたそうです。

二人は海外での挙式を考えていたらしいのですが、男性側の両親が日本式の儀式を重んじており、神前での挙式を希望しているのだそうです。そのため結婚式の準備が前へ進まず、Aさんは口をきかなくなり、家庭内の雰囲気も悪くなって悩んでいたそうです。

そこに前年、シビルで挙式をしたAさんの兄が久しぶりに家に帰ってきて「困ったときは伊藤さんに相談してみた

ベールをしたまま三々九度

ら」と助言、それを受けたAさんは、母親と一緒に私を訪ねてきたそうです。

新郎の父は、神前式にこだわっているのではなく、キリスト教の信者でもないのにチャペルでマネゴトの式をすることに疑問を感じているとのことでした。

実際、このように思っている人は多くそのために挙式に関して両家、新郎新婦がもめるという事例は多々あります。

今回の父親の希望は、「たとえ神前式ではないとしても、最低限の希望としては挙式の中で厳かに「両家固めの盃」をしたい。それと、せっかく京都で披露宴をするのだから、遠方から来られる方々のために舞妓を呼びたいという二点でした。

一方、新婦の希望は、「ウエディング・ドレスを着て父親と一緒に入場したいだけで、とくに挙式スタイルにこだわっているわけではない」ということでした。

それでしたらシビルウエディングがうってつけですと、シビル方式をすすめ、話がまとまりました。

挙式の場所は、列席者が親

族中心ということもあり、披露宴会場内にしました。

当日、本来なら披露宴から応援をお願いする予定だった舞妓たちに、式のお手伝いをしてもらうことになりました。リハーサルを終え、舞妓たちに「では本番もよろしくお願います」というと「よろしゅうおたの申します」と返され、何か癒された雰囲気の中、本番が始まりました。

会場内が暗くなり、新婦が父親にエスコートされて入場、新郎へとバトンタッチしました。これで新婦の希望はかなえられました。

新郎新婦の紹介のあと、二人が誓いの言葉を読み上げたところで、三々九度の儀式を入れました。

「お二人の誓いは皆様に聞き届けられました。この誓いをより固いものにするために、ただいまより祝杯の儀をおこないます。」

言い終えて、新婦に目をやると、驚いたことに、新婦はベールを下ろしたままなのです。

リハーサルでは、ベールを上げていたのでまったく気がつきませんでした。

舞妓たちは、リハーサル通り列席者にお酒を注いでいきます。

このとき戸惑った新婦に、盃に口をつけやすくなるよう、新郎がやさしくベールに手を添えました。

この光景が列席者に、新郎のやさしさと新婦の愛らしさとして実に心地よく映ったようです。

この後は、指輪の交換、ベールアップ、誓いのキスと続き、最後は親族固めの盃と進みました。

舞妓にお酒を注がれ大満足顔の、新郎の父の姿がとても印象的でした。



シビルウエディング・ミニスター
伊藤 保氏

(いとう・たもつ) 1958年北海道生まれ。2004年にミニスターの資格を取得。これまでは約400組の挙式を司る。